

2024年4月28日 説教「パウロの覚悟」

使徒の働き 21章1～14節

ミレトにおいて、パウロはエペソの長老たちに訣別説教をし、「与えることの幸いを」でまとめて、彼らと別れを告げました。長老たちは涙を流しながら、パウロを送りました。

1. ツロの弟子たち (1～6節)

①フェニキヤ行きの船 (1～2) 「私たちは彼らと別れて出帆し、コスに直航し翌日ロドスに着き、そこからパタラに渡った。そこにはフェニキヤ行きの船があったので、それに乗って出帆した。」

パウロの乗る船は沿岸を進み、南 75 キロほどのコス、翌日には南東のロドス島、その翌日には東にパタラに入港しました。そこで、フェニキヤ行きの船に乗り、出帆しました。地中海は大荒れになることもありますから天候も配慮されたことでしょう。

②ツロでの七日間 (3～4) 「やがてキプロスが見えて来たが、それを左にして、シリヤに向かって航海を続け、ツロに上陸した。ここで船荷を降ろすことになっていたからである。私たちは弟子たちを見つけ出して、そこに七日間滞在した。彼らは御霊に示されて、エルサレムに上らぬようと、しきりにパウロに忠告した。」

船の運航は順調で、見えてきたキプロス島を左にしなが、シリヤに航海は続き、ついにツロに上陸したのです。およそ 650 キロの海路でした。船は停泊し荷物は降ろされました。パウロやルカたちは、伝え聞いていたクリスチャンを見つけ出して、そこに七日間滞在しました。そこにいたクリスチャンが、聖霊の示しを受け、迫害があるから、パウロ達にエルサレムに上らないように忠告をしたことでした。

③町はずれまで (5～6) 「しかし、滞在の日数が尽きると、私たちはそこを出て、旅を続けることにした。彼らはみな、妻や子どももいっしょに、町はずれまで、私たちを送ってきた。そして、ともに海岸にひざまずいて祈ってから、私たちは互いに別れを告げた。それから私たちは船に乗り込み、彼らは家へ帰って行った。」

しかし七日後、パウロ一行は予定通り、旅を続けるべく、港へと向かいました。滞在先のクリスチャンたちは、別れを惜しんで、町はずれまで送りました。そして、海岸ではひざまずいて祈り合い、別れを告げ合ったのでした。船は海路を南へと進みました。

2. アガポへの聖霊のお告げ (7～11節)

①トレマイ (7) 「私たちはツロからの航海を終えて、トレマイに着いた。その兄弟たちにあいさつをして、彼らのところに一日滞在した。」

ツロから船は沿岸を進み、紀元前 3 世紀にプトレマイオス二世にちなんで名づけられたトレマイに着きました。そこにもクリスチャンたちがいて、



一日の滞在をしました。

- ②ピリポの家に(8~9)「翌日そこを立って、カイザリヤに着き、あの七人のひとりである伝道者ピリポの家に入って、そこに滞在した。この人には、預言する四人の未婚の娘がいた。」

その翌日には、カイザルの名に因んだ町カイザリヤに着きました。そこには、ピリポがいました。彼はステパノなどと選ばれた、七人の「信仰と聖霊に満ちた人」(使徒 6:5)の一人で、8章には彼の働きが記されています。そのピリポがカイザリヤにいて、家族も一緒でした。その娘たちには預言をする賜物が与えられていました。

- ③アガポ(10~11)「幾日かそこに滞在していると、アガポという預言者がユダヤから下って来た。彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふう縛られ、異邦人の手に渡される』と聖霊がお告げになっています。』と言った。」

何日か、ピリポの家に滞在していると、そこにアガポという預言者がユダヤからやって来ました。アガポはかつて、世界に飢饉が来ると預言して実現したことがありました(使徒 8:28)。そのアガポが、パウロの帯を取って、自分の両手両足を縛り、パウロがこのように縛られて、異邦人に渡されると、聖霊のお告げとして、伝えたのです。

3. 周囲の心配とパウロ(12~14節)

- ①懇願(12)「私たちはこれを聞いて、土地の人たちといっしょになって、パウロに、エルサレムに上らないように頼んだ。」

「私たち」とは、使徒の働きを記した医者ルカや同行の者たちです。彼らもアガポの預言を聞いて、あえてエルサレムに行く必要がないのではと思いました。そこで、カイザリヤの人々共々パウロを引き止めました。

- ②死ぬことさえも(13)「するとパウロは、『あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は、主イエスのためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも、覚悟しています。』と答えた。」

しかし、パウロの覚悟はそれぐらいで揺らぐものではありませんでした。パウロは言いました。「あなたがたは、泣いたりして、私の決心を鈍らせようとするのですか。私は主イエスのためなら、迫害を受け、死ぬことになったとしても良いと考えているのです。」

- ③御心のままに(14)「彼が聞き入れようとしないので、私たちは、『主のみこころのままに』と言って、黙ってしまった。」

そこまで言われれば、同行の者達も、そこにいる主にある弟子たちも、それを受け入れるしかありません。「主の御心になるように」と祈るばかりでした。

《結論》

振り返れば、パウロ一行の第三次伝道旅行は、アンテオケから陸路をとり、

アジア地域を経て、エペソでの3年にわたる宣教がありました。反対する働きもありましたが、多くの実りを与えられる年月でした。その後、マケドニヤ、ギリシャの地での宣教をした一行は、この旅を終えるべく、パウロに示されたエルサレムへの道を進むことになりました。そして、ミレトの地では懐かしいエペソの長老たちとの訣別をし、いよいよ海路をとって目的地に向かいました。

そんな船旅に伴う出来事が、今朝の聖書箇所にあります。そのなかにおいて、注目すべきことがあります。それは、パウロの周りにおいて、彼がエルサレムに行くことを、とどめる周囲の動きです。それも、聖霊の語りかけによるのですから、気になります。第一に、ツロの地において、そこにいるキリストの弟子たちが御霊に示され、パウロたちがエルサレムに行くことは避けた方が良くと導かれて忠告したのです。しかし、そこではパウロ一行は、それを心にとめつつも、旅を続けました。第二はカイザリヤの地においてです。ピリポの家に滞在していたパウロ一行のところ、アガポという預言者がやってきたのです。彼に聖霊は告げられて、パウロが縛られて異邦人の手に渡されることが、伝えられたのです。これには、カイザリヤの地のクリスチャンはもちろんのこと、ルカなどの一行もそろって、パウロにエルサレム行きをやめるように促したのです。預言者アガポの預言に、パウロの弟子たちの心も動かされたのでしょうか。パウロ先生の命をなんとしても守らなければと思ったのでしょうか。

思い出してください。あのエペソの地で、町が大混乱したことがありました(19:21~)。それはパウロが偶像礼拝を戒めたことから、デメテリオという銀細工人が反発して、職人たちも巻き込んでの騒動を起こしたのが発端でした。その後は劇場に多くの人々が集まる事態となり、パウロはその静止にあたりうとしました。しかし、弟子たちはパウロがそこに出ていくことを強く止めました。そこに行かないことは確かに導きでありました。パウロはこの時、弟子たちの言うことを受け入れました。ところが、今回は二回にわたって、説得されても彼はそれを聞きませんでした。それも、御霊の示して迫害があることを示されても、彼はエルサレムに行くことをやめようとはしませんでした。謙遜を旨とする彼がどうしてこのような反応をしたのでしょうか。彼は弟子たちをたしなめて、「私は、主イエスのためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことも覚悟しています。」と伝えました。パウロは、ピリピ書1:21で「私にとっては生きることはキリスト、死ぬことも益です」と記しています。今ここで命を懸けてエルサレムに向かうことは、彼の根本的生き方に関わっていたのです。

私たちはこのパウロの信仰と精神から、何を学べるでしょう。キリストという方が命をかけるに値する方であることを、パウロは証明してくれています。私たちもあれこれと思い煩わずに、「みこころのままに」とキリストに委ねて歩みましょう。これから歌う讚美歌285の作者ボナーも信仰の覚悟を証しています。1~4番まで、委ねる信仰を歌っています。「いかに暗くけわしくとも、みむねならば われいとわじ」「ゆくてはただ、主のまにまに、ゆだねまつり 正しくゆかん」。彼もパウロから教えられたのでしょうか。私たちもこの讚美歌を歌い、キリストにまかせて、この週の歩みを歩いていきましょう。